

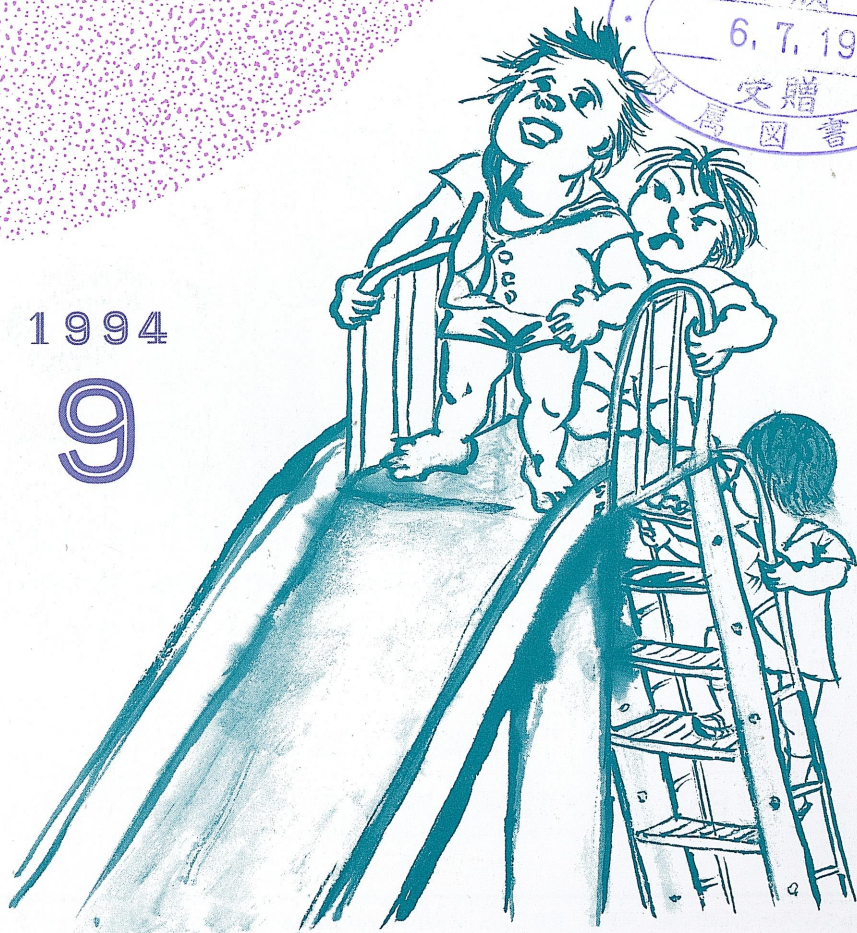
家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



1994

9





## 遊びが育つ保育実技

新幼稚園教育要領の課題である「遊び中心の保育」を実践するために、イラスト入りで遊びの実例を紹介したシリーズ

### ②3 保育のための 自然ウオッチング



- 領域「環境」の新しいハンドブック——子どもの質問に答えるための虎の巻！
- 環境に優しくする心を育てる唯一の保育図書！



●コンセンダンガサ

身近な動植物の姿や仕組みをやさしいイラストで紹介して子どもの好奇心、質問に答えるためのハンドブック。著者自身の絵と文が楽しく分かりやすく、知らず知らずのうちに環境に優しくする心を育てられる唯一の保育図書です。

山内昭道・著

B5変型判・128頁・定価2,100円（税込）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

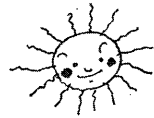
# 幼 児 の 教 育



第93卷 第9号

幼 児 の 教 育 目 次  
—— 第九十三卷 第九号 ——

© 1994  
日本幼稚園協会



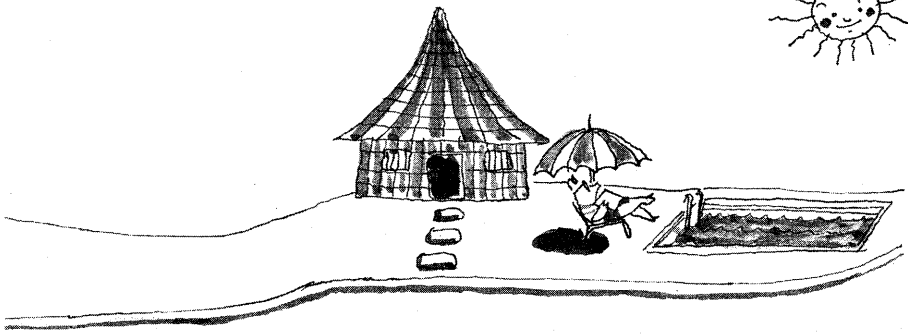
子供讃歌……………(4)

子どもと純粋に向き合う保育の場を……………津守 真……………(6)

あそびの研究(2) おもちゃと遊び文化史のなかの江戸……………太田 素子……………(10)

秋の園芸作業……………市原 菊恵……………(18)

NちゃんとY先生(1)……………田代 和美……………(29)





読み物のページ 取り戻された子ども時代

李相琴・著 『半分のふるさと』の場合…………… K・M・H…………… (38)

今も迷いながら…………… 高橋 和仁…………… (45)

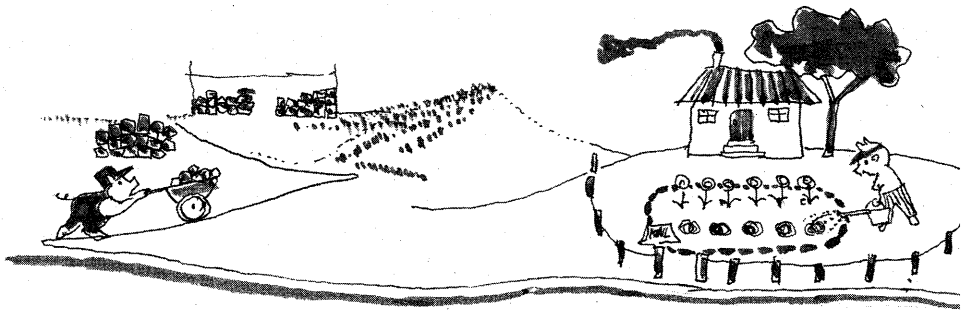
子どもたちへのまなざし(9) すずめの学校…………… 松井 とし…………… (54)

ある日の育児日記から(45)…………… 佐藤 和代…………… (56)

児童館に集う子ども達…………… 高橋あき子…………… (57)

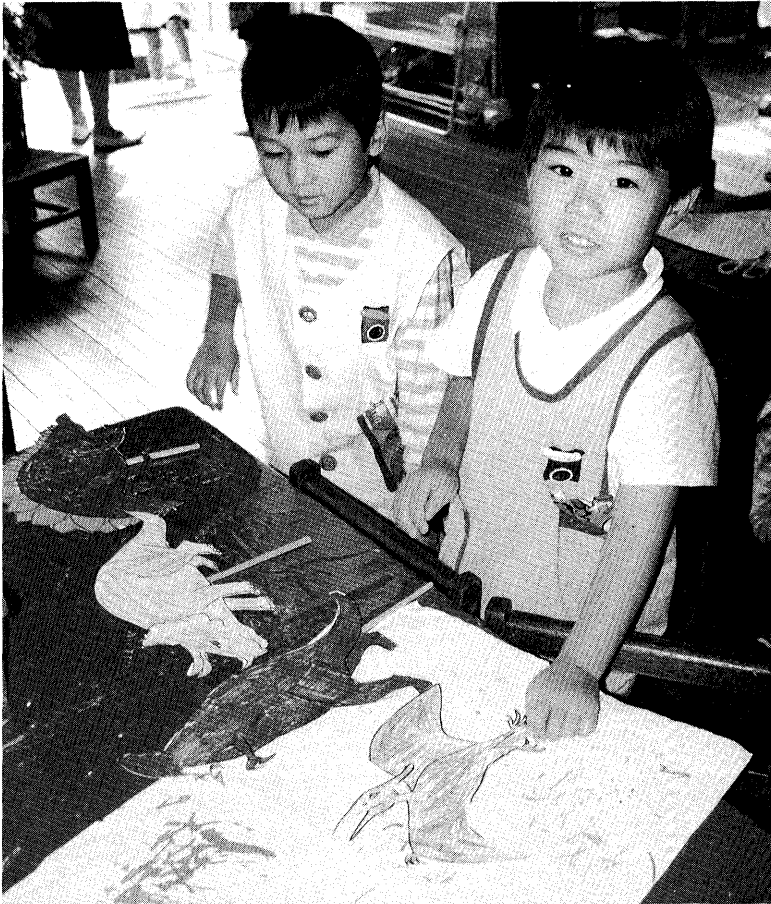
表紙・梅田 なほ／扉題字・堀合 文子  
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

編集委員・本田 和子／田代 和美  
カット・福田 理恵  
榊田 正子・田中三保子  
編集部・大沢 啓子



# 子供讚歌

撮影・平野 清





私がつくった、おめん



# 子どもと純粹に向き合う

## 保育の場を

津守 真

身体の動きに合わせて動くこと

保育者が子どもの身体の小さな動きに敏感になること、そしてそれに答えて動くことは、保育の出発点である。

身体の動きには、無意識の心の動きがあらわれる。

子どもの身体の動きに合わせて、静かに、同じように自分も身体を動かすと、子どもの心の動きが伝わってくる。それも殆ど無意識の作用である。

子どもの身体の動きとは逆の方向から答える場合もある。たとえば、子どもが物を差し

出すとき、私は手を出してそれを受け取る。それによって、子どもの私に向けられた好意が伝わり、受け取る私の関心もまた相手に伝わる。

私がつと別の身体の動きを工夫して動くときもある。たとえば、子どもが手を横に出したとき、私は手を上にあげる。子どもが走るとき私は歩く。それによって、私は子どもとは違う自分の動きに気が付くし、子どもは違った方向から自分の身体の動きを意識するだろう。

これまで私が子どもとゆっくりとつきあうと言ってきたことは、こうした身体の応答であることに私は気が付いた。

このようにして子どもと身体の応答をすることによって、私は自分だけの動きのレールから出て他者と出会い、その他者に合わせて違う動きをなしうる自分を発見する。

そのとき、子どももまた、外部から動かされる自分ではなく、たとえ小さなものであっても、自分の心の中から新たな可能性が開かれることを体験するであろう。

このことが連続してゆくと、子ども自身の内部は次第に温められ、熱せられて、自分自身の表現が形をなしてくる。

遊びに、あるいは作品に、子どもの内心の悩みや、願望が形を成して表現されるのはこのようなときである。

このことは、保育者が、程度の差こそあれ、毎日経験していることである。

## 前提

身体の動きに応答する以前に前提になることがある。それは、子どもに親しまれる存在になること、どの子どもにも、あるがままで価値を認めることである。

まず自分が子どもにとって近づきやすい存在になるにはどうすればよいかを考え、そのようになること。それぞれの子どもが、変化しなくとも、いまのままで価値があることを心から認めること。ことが話せるようにならなくても、もっとうまくできるようにならなくとも、そのままでも立派な子どもである。人はひとりひとり違う。違う故に価値がある。

ただし、子どもの小さな身体の動き、心の動きに敏感でなければならぬ。

## 保育の場

子どもの中に、新たな可能性が開かれるようにと、大人と子どもとが純粹に向きあうことがゆるされる場があることは、有り難いことである。そのことを課題とした空間と時間が保育の場である。幼稚園、保育園、学校は、本来そのような場である。

子どもと純粹に向き合うには、大人自身が、自由で柔軟な心になっていなくてはいけない。そうでないと、大人はかえって子どもを縛り、その可能性を閉ざすことになる。保育の場は、大人も、自分が創造的になることを純粹に課題とする場である。

日常生活の中では、しばしば、大人は日常の必要にのみひきずられ、その観点からだけ子どもとかわり、他の可能性を見ることが困難になる。専門的な保育の場は、子どもと



向き合う場である。

保育は、毎日のことであり、長時間である。また、複数の子どもや大人が一緒の場である。その点で、カウンセリングやセラピーとは違う。保育の場では、子どもが人を選ぶ自由、人から離れる自由がある。そこで子どもはゆっくと自分自身を出して、自分の生活をつくり、共同の生活をつくる。

保育の場で新たな可能性を開かれた子どもは、日常生活にもどり、それを変える力をもつ。

日常生活のただ中に、保育の場を創り出すことも可能である。それがなしえられるときは幸いである。



(愛育養護学校)

## おもちゃと遊び文化史のなかの江戸

太田 素子

### 一、「遊ぶ子ども」の発見

「遊ぶ子ども」といえば、『梁塵秘抄』の「遊びを  
せんとや」の歌を思い出される読者も多いことだろ  
う。十二世紀の今様のなかに遊ぶ子どもを高らかに  
歌いあげたものがあるということは、これからご紹  
介しようとする江戸時代の「遊ぶ子どもの発見」  
は、あるいは「再発見」なのかもしれない。つま

り、遊ぶ子どもに対して大人が共感的な注目のまな  
ざしを向けた時代が、古代末期から中世初期に存在  
したものの、一旦何らかの事情で消失し、江戸時代  
に入って再び新しい様相をおびて登場したというこ  
とである。

筆者には中世史の素養がないが、『梁塵秘抄』の  
研究者である秦恒平氏（NHKブックス、一九七八  
年）や、中世史の横井清氏（『中世民衆の生活文

化』東大出版、一九七五年）は、「遊びをせんとや」の歌は「遊ぶ子ども」と「大人である自分」を区別しているという意味で、むしろ古代的な歌だとみなしておられる。そして、中世人はもっと大人自身が楽天的に、エネルギーに遊ぶ人々だと見ておられる。

たしかに大人と子どもが混じり合って働き、かつ遊ぶ中世社会においては、子どもの遊びだけを取り立てて注目するまなざしは生まれにくかったかもしれない。そう考えると、以下にご紹介するような、戦国末期から江戸時代初期におこった遊びに対する人々のまなざしの変化の性格が、より判り易くなるようにも思われる。

子どもの発達に即した教育を説いて、「東洋のルソー」という評価もある貝原益軒の『倭俗童子訓』に、「小兒遊びを好むは、常の情なり。…道に害なき業ならば、あながち押さえかためて、その気を屈

せしむべからず。ただ後にすたらざる遊びはうち任せがたし」と述べている下りがある。

ここには、遊びを押さえ過ぎて元気を無くさせてはいけないとか、大人まで統いてしまう遊びはいけないとか、一読しただけではその真意を図りかねるような言い方がみられる。子どもの精神発達における遊びの意義を強調するような、西欧近代の遊び論とはかなりの距離を感じさせられるのは確かだ。

ところがよく読んで見ると、十七世紀半ばから十八世紀前半の子育て論には、同じようないい方がほかにも見つかる。中江藤樹は『鏡草』の中で、子どもの遊びはやりたいうようにやらせた方が良く、成長すれば自然に遊ばなくなるのだから、と説く。十八世紀の稲葉宇斎になると、好色、利欲、鬭争心を募らせるような遊びは幼いときから禁すべきだが、弓矢や人形、こま、凧などは大人になったら止む遊びなのだから年齢を考えて許すべきだと、許容してよい子ども遊びを限定しようとしている（『幼君補佐



の心得」。

このように見てくると、実は論者たちの趣旨が、大人の遊蕩を厳しく禁ずると共に子ども遊びは大人遊びとは別物であって、それは大目に見てやらなと元気を損なうということに、大人たちの注意を喚起しようとしていることがわかる。近世初頭には禁欲的な生活態度が社会全体に広がりはじめたといわれるが、その中で子ども遊びは大人遊びのように一律に禁止されるべきでないということが、改めて「発見」されてきたのではないだろうか。

そのような禁欲的な生活態度の一般化と子どもの遊びの承認は、儒教的な子育て論にみられるだけでなく、井原西鶴の写しだした町人的な世界でも同質の現象が見出される。西鶴は、前期の作品である『好色一代男』など一連の好色ものにおいては、都市の一画、廓という限定された世界で繰り広げられる上層市民の遊興やその美意識を描いた。ところが

後期の作品、とくに『日本永代蔵』などでは無名の町人が日本有数の長者になり上がって行く際うみだされた禁欲的な処世訓が取材されている。

西鶴の作品に象徴されるような遊興と勤勉の分化は、実はその時代の人々の生活の中に普遍的に生じつつあった分化でもあったのではないか。遊興は廓という都市の一画に限定され、まじめな日常生活と空間的に区分された。また時間的にも、遊んでよい時期は、年齢段階でいえば子ども期と老年期、暦でいえば日常生活(ケ)と区別される祝祭日(ハレ)に限定されたのである。『日本永代蔵』巻二の京都室町の呉服屋の娘は、「八歳より墨に袂をよごさず、節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、…」と、その早熟ぶりをほめそやされている。この短い文章からも、七歳までは遊びを許される幼児期と感ぜられていること、遊びは節句と盆などハレの日に集中的に楽しめるらしい事が窺われるのである。

以上のような「遊ぶ子どもの発見」に関しては、

フランスの社会史家P・アリエスがルイ十三世の日記分析を通して行った問題提起以来、日本でも研究が増えつつある。多様に出されつつある論点を、実証的な土台も固めながら整理して行く仕事だが、今後必要とされよう。

## 二、おもちゃと遊び文化史の中の江戸

イギリスの民俗学者A・フレーザーは、①独楽やボール、凧など世界中に普遍的に見られるおもちゃと、②大人社会の社会的経済的变化を如実に反映して変化して行くおもちゃ、というようにおもちゃを二分している。その上で、②については古代の宗教的な儀礼と関わりのあるおもちゃとルネサンス以降のおもちゃ文化の発展史があとづけられている(和久洋三訳『おもちゃの文化史』)。そこには、子ども遊びが間接的な仕方では大人社会の文化を反映しながら発展しているという視点がみられる。

筆者が江戸のおもちゃ文化史との関わりで、特に興味を持ったのはヨーロッパで「人形の家」がおもちゃ文化史の中に有した特異な位置である。「人形の家」は、鑑賞用の美術品だから、子どものおもちゃ文化史の中に位置付けることに抵抗のある向きもあるであろう。たしかに「人形の家」は子どもも自発的な遊びの素材とはなりえない。しかし、それが鑑賞品として子どもも含めた人々の玩具や美術品に対する嗜好に与えた影響は甚大なものがあっただろうと思う。

かつてK・グーベルは、「人形の家」の初期のにないであったオランダ自由市民について、「彼ら自らが畢竟大きな子どもに過ぎぬ」と形容した。A・フレーザーもその指摘を受けて「あらゆる人の中に永遠に潜んでいる童心」の現れとみているが、自らの内なる童心の発見が、のちに子どもの遊びにたいする共感的な理解を深める契機となったと見ることができよう。

人形の家の発達は、おもちゃを商品生産の対象として浮上させたし、おもちゃの技術的芸術的水準を高める上でも大きな貢献をした。そして次第に、子どもの自発的遊びにより適したおもちゃに展開して行く。十七、十八世紀の赤ちゃん人形、張り子もの、錫の人形、紙製のおもちゃ（着せ変え人形や紙の家）の発達など、より子どもの遊びに即したおもちゃ文化の開花は、ある部分「人形の家」によって用意されているといっても過言ではないのであろう。

実は、このようなルネサンス期のおもちゃ文化に関する記述が、江戸の雛人形の史的意義を理解する上でも示唆に富んでいる。人形の多様化や装飾性の増大、ままごと道具への関心、おもちゃの市場的価値の拡大、からくり玩具の流行など、総じて空想性や想像性が民衆と子どもの世界にまで浸透して来る江戸のおもちゃ文化史は、ヨーロッパの十六、十八世紀との「重なりとずれ」を説明すること、比較史

的な視点で見てゆくことがとりわけ有効な対象であるように思われる。

ところで、このように子ども文化が大人の文化を間接的な仕方でも反映しながら発展して行くという側面から見えていったときに、江戸時代後期の子どもの遊



びの中で、ひととき興味深いのがゲームルールのある遊びの浮上である。

先にも引用した横井清氏は、中世を代表する遊びとして、武力統治の時代にふさわしい力技（すもう、おしくらべ等）や、民衆の計数能力の発達を前提とする盤上の遊び、数とり遊び（碁、将棋など）をあげている。これら中世的な遊びは江戸時代の子どもの間でどのように引き継がれ、変容していったのだろうか。

まだその全体像は十分実証的に明らかにされていると思えないけれども、江戸後期から幕末の遊技論——山東京伝『骨董集』一八一五年、喜多村信節『嬉遊笑覧』一八三〇年、喜田川季荘『守貞漫稿』一八五三年など——を読むと、戸外の力技は次第にかくれんぼや鬼ごっこなどルールを持つ集団遊びに比重を移していたのではないかという印象を受ける。とくに『嬉遊笑覧』などは、子ども遊びの採集に際して鬼決めの方法や罰則の採集などルールの些

細なバリエーションを集めることに関心が向いているのだ。近世社会は、公事（くじ、裁判のこと）が一般化した社会でもあり、実は子どもの遊び文化の洗練も、あるいは大人社会のルールに関する観念の発達と関わりのあることなのかも知れない。

このように文化史としての子ども遊びの研究は、一面では人々の子ども観の研究であり、同時に大人の文化と子ども文化の関係史の解明をも課題として視野にいれる必要があるのかもしれない。

### 三、遊び文化史と幼児教育

F. フレーベルは、巷の遊びの採集と構成遊び用の作業具の創作によって、幼稚園教育の内容と方法を生みだした。特に後者は、遊びの素材を吟味すること、子どもの遊びに教育的な影響力を行使しようとしているのだから、子どもの遊び文化の歴史の中でも特筆されるべき大事件である。

このように大人が意図的な教育の対象として子どもの遊びを見つめるようになるのは、日本ではいつごろの事になるのだろうか。

近世の子育て書の中では、管見の範囲では上杉鷹山『輔儲訓』（一七七五年）のなかに「教育の対象としての遊びの発見」の最初の形を見ることができると思う。鷹山は

「狂い楽しみ申さる事も、時としては十分これ有りたく候。その節は、面々も痛み入り候えども、年を忘れて相手致し呉れ候様に、頼み入り候」

「朝夕遊戯の内にも何一つ教えに非ざるはこれ無く…幼稚の相手を致し候は、戯言・戯動の上にも可、不可はこれ有る事」

と述べて、儒教的なしつけ教育の面から遊びの指導に言及している。

また、都市好事家の遊戯論の中では、山東京伝の記した『骨董集』に、

「正月男児にぶりぶりをもてあそばせしは、年始に農業のまねびをさせ、農事をすゝむる意なるべし」

とか、あるいは雛遊びは女兒にとって家事を模倣する良い遊びだという具合に、遊びの発達の意義に言及しはじめているのが、時期の早い例である。後者は、模倣という子どもの発達心理への理解が注目されると共に、大人の仕事や労働につながる遊び文化が推奨されているという点で、健康な庶民性を現してもいるのかも知れない。

このように、次第に子どもの精神発達にしめる遊びの意義への注目は前進してくるとはいえ、遊びの質を高めるためにおもちゃの分析的な研究を進めるという幼児教育の思想は、日本ではついに自生しなかったのではないか。そのことが、明治期になって幼稚園教育を移植しようとしてとめたとき、学校的な幼稚園にゆれてしまった一つの要因だったように思われるのである。明治の幼稚園関係者は、試行錯誤

を繰り返しつつ、「遊びの教育的指導とは何か」を  
発見しなければならなかったのである。

(郡山女子大学)

〈参考文献〉

- 酒井欣『日本遊戯史』建設社 一九三三年
- 有坂与太郎『日本玩具史』(上下) 一九三二、三年
- 同『日本雛祭史考』建設社 一九三二年『雛祭新考』  
思文閣出版 一九四三年
- \*
  - P. アリエス『子供』の誕生』(杉山光信他訳) み  
すず書房 一九八〇年
  - A. フレーザー『おもちゃの文化史』(和久洋三他訳)  
玉川大学出版 一九八〇年
- \*
  - 本田和子『子どもの領野から』人文書院 一九八三年

○太田素子「近世子育て論への道標——十三、十八世紀  
武家家訓における幼児観と遊戯観」日本保育学会編『保  
育学年報一九八七年版』フレール館 一九八七年

○同「近世遊び文化と子どもへの教育関心」佐藤玩具文  
化財団編『玩具文化』三号 一九八八年

○同「遊ぶ子どもへの注目と共感」木下龍太郎他編『保  
育の思想』労働旬報社 一九八七年

○木下龍太郎「遊びの民俗学、習俗の遊び」『子ども百  
科』中央法規 一九八八年

○多田道太郎他編『日本の美学』第十五号(特集・遊  
び)ベリかん社 一九九〇年

○森下みさ子「〈組上〉の世界——玩具からの発信」  
『舞々』十五号 舞々同人発行

○江戸子ども文化研究会編『浮世絵のなかの子どもた  
ち』くもん出版 一九九三年

# 秋の園芸作業

市原 菊恵

九月上旬は、日中、夏の暑さが残っても、夜は日毎に気温が下がり、中旬を過ぎた頃からはずっとしのぎやすくなってきました。植物も暑さから解放されて生氣を取り戻し、又元気に活動を始めます。秋は春に次いで植え替え、株分け、種蒔き、球根の植え付け等、いろいろな作業ができる時期ですが、次々とやってくる台風や、真近かに控える冬にそなえ、本格的な寒さが来る前に、充分新しい根が張れるように、作業を進めましょう。

## 〈観葉植物〉

上旬は熱帯や亜熱帯がふるさとの植物でもその大部分が最も良く生育するのは20度〜26度C位ですから、この時期は少々暑さで株が疲れ気味です。涼しくなり出したらしっかり手入れをして丈夫な株に育てておくと、苦手な寒い冬も元気にのり切ることができます。

## ○水やり

上旬はまだ夏日もあり、気温が高いので良く乾きます。鉢の土の表面が少し乾き始めたらずくに水をやりま



す。薄くて広い葉を沢山つけている植物や、吊り鉢、鉢の割に植物が繁り過ぎているもの等は、水切れを起こしやすいため注意しましょう。冷房が入っている室内では湿度不足になりがちなので、鉢土を湿らすだけでなく、葉にもスプレーを吹きかけて湿度不足を補うようにします。中旬を過ぎ秋の気配を感じる頃からはずっと乾きかゆるやかになってきますから、この頃からの水やりは、鉢土の表面が白く乾いてからにします。与える時は鉢穴から水が抜け出るまで充分な水やりをします。こうすると、土と土の粒子の間に水が通って行く時に、古い空気を鉢の外へ押し出し、水の通った後からは新しい空気が土の間に入って行って根が新鮮な空気にふれ、良く伸びるようになります。ですから、乾きの激しい夏の間以外は、鉢皿に水を溜めておかないことが望ましいのです。

#### ○置き場所

直射日光の下で美しい斑<sup>ふか</sup>が鮮やかに色づくクロトウや、強い日光を好むガジュマルやインドゴムノキ等は引き続き日当たりの良い所に置きますが、中旬頃からは強

い日光をさけていた種類の植物も少しずつ光に慣らして行き、下旬からは特に弱い光を好む種類以外は良く日に当て、ガッチリした株に育てておくと冬越しが楽になります。十月いっぱいまでは屋外の自然の条件下で育てられますが、気温が下がるにつれて生育がゆるやかになってきますので、高湿を好む種類から順に良く日の当たる室内に取り込むようにします。最低気温が15度Cを切り始めた頃を目安にします。室内に暖房が入る前ですと戸外と室内の温度差がそれ程ない時期なので植物も環境の変化に適応しやすく、室内の環境に慣れた頃、暖房が入るようになると植物のトラブルはずっと少なくなります。そしてこれからは日当たりだけでなく、植物の耐寒温度を考慮に入れながら置き場所を決めることが大切になってきます。

#### ○肥料

十月までは生長期に入っている為、肥料は与えますが、与える量は春の半分の量に減らします。水に溶かしてやる速効性の液肥は規定の倍に薄め週に一度ずつ水や

光線量別一覧表

<p>好むもの 強い日光を</p>	<p>ガジュマル、ベンジャミン、サンセベリア、クロトン、ストレリチア、インドゴムノキ、ユッカ、パキラ、フェニックス、シェフレリア</p>
<p>日陰を好むもの 中位の明るい</p>	<p>ポトス、スパシィフィラム、モンステラ、シンゴニューム、トラディスカンチャ、アスパラガス、オリヅルラン、ブライダルベール、ツディシダ、マランタ、アフェランドラ、サクララン、アンスリューム</p>
<p>育つもの 弱い光でも</p>	<p>ピレア、アグラオネマ、ペペロミア、フィットニア、アジアンタム、エビスシア、プテリス、ディフェンバギア、タニワタリ、フィロデンドロン</p>

耐寒温度一覧表 (越冬に必要な温度)

<p>10度C 明け方</p>	<p>アグラオネマ、フェランドラ、アロカシア、アンスリューム、クロトン、ディフェンバギア、フィットニア、ペペロミア、エビスシア</p>
<p>6度C</p>	<p>アカリファ、アナナス、ガジュマル、カラジューム、カラテア、ドラセナ、フィロデンドロン、ペリオニア、マランタ、ポトス、サンセベリア、スパシィフィラム、ストレリチア、パキラ、ベンジャミン、シェフレリア、シンゴニューム</p>
<p>以上 0度C</p>	<p>アイビー、アジアンタム、アスパラガス、オリヅルラン、インドゴムノキ、タニワタリ、タマシダ、テーブルヤシ、フェニックス、サクララン、プテリス、トラディスカンチャ、ピレア、ブライダルベール、ツディシダ、ユッカ</p>

りをかねて与え、鉢の表面に置く緩効性の固型肥料は月に一度与えます。それ以降は気温の低下と共に根の活動がにぶくなって行き、肥料を吸わない休止期に入る為、春まで肥料やりは休みます。ですが、建物全体が一年中コントロールされている集合住宅では、冬でも明け方の最低温度が10度Cを下がらない場合も多く、こうした場合は液肥のみを春まで与えます。秋からの肥料やりのコツは、濃いものをさけて、薄いものをこまめに与えることと、寒さに負けない丈夫な株にする為に、カリ分の割合が多いものを選ぶようにします。

### ○整姿

夏の間に伸び過ぎた枝やつるは、株全体の形を整えながら切りつめます。これからの時期は日一日と気温が下がるので、春の様には伸びません。ですから乱れてバランスを崩している部分のカットにとどめます。枯れ葉や痛んだ葉も取り除きましょう。カットした枝やつるは上旬の早い時期にさし芽をすれば良く根つきますが、遅くなるにつれて根つきが悪くなってきます。

### ○植え替え

大きく育って鉢とのバランスが悪くなり、少しの風にも倒れやすくなったものや、鉢穴から根が沢山伸び出しているような鉢は、根が鉢の中にいっぱい張っていて、水をやってもすぐに乾きますし、肥料も吸いにくくなっていくので植え替えが必要です。又、水をやっても回復せず、さらにぐったりとしている株は根腐れを起こしている場合が多く、見つけ次第、早く植え替えないと手遅れになってしまいます。いずれも十月上旬までにすませます。

### 〔植え替えの方法〕

用意するもの……一、二回り大きな鉢、赤玉土の大粒、

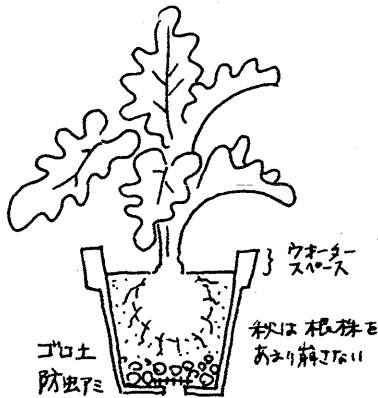
赤玉土の小粒5・腐葉土3・バーミキュライト2の割合

合の混合土（市販のミックス培養土でも可）、防虫

ネット、古菜箸、土入れ、ハサミ。

### 手順

①左手で鉢のふちを持ち上げ、右手のこぶしで鉢のふちをトントンたたいて植物を鉢から抜きとります。



セロームの植え替え

② 根株の回りの土を箸で少し落として根を露出させます。こうすると新しい土に根が伸びやすくなります。

③ 鉢穴に防虫ネットをしき、排水用の赤玉土の大粒を2、3 cm 入れます。これには素焼鉢の破片でも、発砲スチロールでもかまいません。

④ 用土を1、2 cm 入れ、株元が新しい鉢の八分目あたりになるように株元の位置を注意しながら根株を鉢にセットします。株元から鉢ふちまではウォータース

ペースといつて、水やりの時にいったんここに水が溜まるものの、その水が鉢外にこぼれ出ることなく鉢の中に納まって行く為の大切な空間です。これが少ないと後で水やりに大変苦労することになります。

⑤ 根株と鉢のすき間に株元まで用土を入れ、鉢のふちを両手で持って二、三回軽く床に上下させ、株を鉢に落ちつかせます。

⑥ 株元から静かに水やりをします。始めは泥水が沢山出てきますが、きれいな水になったら用土全体に水が通り抜けたしるしです。

〔植え替え後の管理〕

雨や風の当たらない明るい日陰に四、五日置いて、葉先がピンと元気なら少しずつ日に当てるて行きます。植え替え後十日位から肥料やりを始めます。根が新しい鉢に張るまではあまりあちこち動かして株をぐらつかせないように注意しましょう。

○アジアンタムの再生法

涼しげで優しい感じのするアジアンタムは一年を通し

て人気の鉢物ですが、いったん乾かしてしまおうとしおれた葉は水上げが悪いので一度にあわれな姿になってしまいます。ですが根は丈夫でまだ生きていますから、又、新たに芽吹かせて仕立て直しをします。

用意するもの……ハサミ、透明なビニール袋。

手順

①アジアンタムの地上部は株元1cmの所で全てカットします。

②株に充分水やりをしてからビニール袋の中へ入れます。この時ナメクジやかたつむりがいないか確かめましょう。ビニールの口は九月上旬まででしたらむれ過ぎない為に開けておきますが、それ以降は空気を入れてふくらまし閉じておきます。

#### 〔管理〕

ビニール袋は日光が当たらない明るい日陰に置いて乾かさなないようにしていると、やがて小さなせんまいが沢山見えてきます。そして葉を広げ、小さな葉がふれあう程になったら袋から出し、再生の完成です。

#### 〈草花〉

朝、夕に涼しさが感じられるようになると本来の生育温度になるので、又、良く生育し始めます。園芸店の店先にも又、沢山の種類が並びます。何度も補充しない球根類は、売り出し始めの頃に求めた方が種類も多く、沢山ある中から良い球根を選び求めることができます。

#### ○水やり

花の咲いている株は良く水を吸います。水が切れると咲いている花ばかりでなく、つぼみまで痛めてしまうので、水切れにならないように乾き始めたらずぐに水やりをします。

#### ○日光

次々とつぼみをつけるには日光が必要です。又、日光が充分当たらないとその植物本来の花色が出ませんし、これから体を大きくする植物は、ヒョロヒョロと伸びた徒長苗になってしまいます。終日できるだけ日に当てるようにして丈夫な株に育てます。

#### ○肥料

花の咲いている株は肥料切れになると花が小さくなったり、つぼみが少なくなったりします。長く咲き続ける種類は特に肥料切れにならないように液肥は週に一度、固型肥料は月に一度の割で二種類の肥料を併用するとしっかり効いて良く育ちます。

### ○病虫害

ベゴニアセンパフローレンスの葉に、白い粉のようなものが点々とつくことがあります。これはウドン粉病で、次第に広がって株を枯らしますので、ベンレートを早目に散布します。又アブラ虫には散布する速効性の乳剤の外に、株元に顆粒状の薬をまいて植物にその成分を吸わせ、それを吸ったアブラ虫が死ぬ浸透性の殺虫剤もあります。

### ○切り戻し

夏中咲き続けて草丈が高くなったサルビアやマリゴールド、咲き進んだ茎が目立つようになったベゴニアセンパフローレンス等は、秋遅くまで楽しませてくれる植物ですから切り戻して姿を整えておくと脇芽が伸び

て、又、にぎやかに咲いてくれます。ですが早目に行わないと芽吹きに時間がかかって、結局花が少なくなってしまうから、九月上旬には済ませます。

### ○秋の草花苗の植え付け

春の時程ではありませんが、秋用の花だん苗が出回ります。夏の間すっかり花が途絶えてしまっていたら、プランターに好みの配色で植え付け、玄関先に置くと、あたりがばあっと華やいで、活気がよみがえります。

### ○宿根草の株分け

毎年行う必要はありませんが、三年以上株分けをしない株は、込み合いすぎて日光不足や肥料不足から、元気に育たなくなってきました。株数を殖やしたり、老化した株の更新を計る為にも株分けをします。涼しくなると根が活発に動きだす九月中旬から十月上旬が適期で、寒さがくる前に新しい根が充分伸びるようにします。

### 〔株分けの方法〕

手順

①株をそっくり掘り上げて根をほぐし、植物によっては

三、四芽ずつ付けたかたまりに分けます。

②耕して準備をしておいた新しい場所に、根が乾かないうちに植え広げ、軽く根元を押さえます。鉢植えでしたら新しい用土で植え付けましょう。

③十分に水やりをして根を土になじませるようにします。

ミヤコワスレやアルメリア、ガーベラ等がこの様な方法で株分けできます。

### ○マーガレットのさし芽

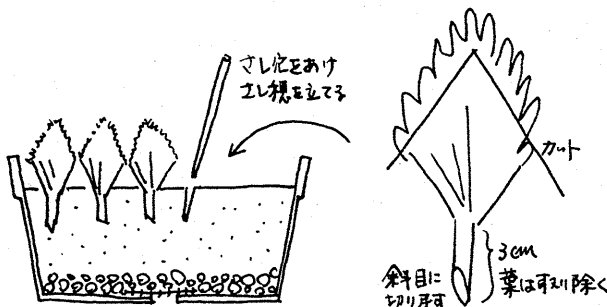
マーガレットは露に当てなければ冬越しをして木質化し、さらに来年は高い所で咲くようになります。低く染しむには元気な枝先を秋にさし芽としておくと良く根づいていくらでも殖やすことができます。春に低くいっせいに咲き揃うとそれは見事です。一度ぜひお試しください。

用意するもの……平鉢（イチゴパックでも可）、赤玉土の大粒、赤玉土の小粒とバーミキュライトを等量混ぜたもの、防虫アミ、ハサミ、カッターナイフ、竹ぐ

し、コップ

手順

①平鉢の鉢穴に防虫ネットをしき、赤玉土の大粒をふた並べ入れてから用土を八割まで入れ、充分湿らしてさ



マーガレットのさし床



し床の用意をします。

② 枝先から10 cm位の長さにハサミで切り取り、水の入ったコップにさし立てて20〜30分水上げをします。

③ ハサミの切り口よりも1 cm上の所を良く切れるカッターナイフで斜目に切り戻します。

④ 切り口から3 cmは土に埋まるのでこの部分の葉は茎を痛めないように取り除き、葉先も山形に1/2切りつめてしおれを防ぎます。

⑤ 竹ぐしでさし穴をあけながらさし穂がふれ合う程度に鉢いっぱいにして行きます。

⑥ さし穂と用土が密着するように、さし穂の上からハス口を使って静かに水やりをします。

#### 〔管理〕

さし床は強い風をさけて日光に良く当て、乾かないようにしている、しおれ気味の葉がピンと元氣ついできます。東京では霜の当たらない日溜りでそのまま冬越しをしますが、寒い地方では室内に移します。そして春になって霜の心配がなくなつてから植え広げます。

#### ○シクラメンの鉢替え

春から引き続き水やりをして夏越しをしたウェット法の株も、五月以降水を切り、すっかり乾かした状態のドライ法の株も、秋の彼岸の頃に植え替えをします。手順は観葉植物の植え替えと同じですが、古い土は全部落とすことと、球根のようなかたまりの上部が1、2 cm必ず土から出ているように植え付けます。ここが土に埋まっていると葉や花芽の元がくさりやすく上手に育ちません。肥料やりは一週間後から与え始めます。十一月には立派なシクラメンの鉢が店先に並びますが、あの時期に売り出される鉢は、夏の間を高冷地でどんどん育てておいて、寒さが来たら温度をかけて促成栽培や開花調節を行つてゐるからです。自然のまままで育てる家庭園芸では、春になつてから咲き出します。

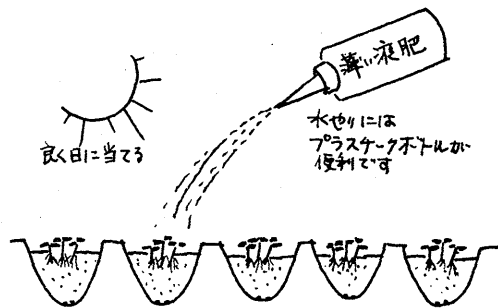
#### ○秋の種まき

袋の説明書にある発芽温度に注意して適期をのがさず蒔くようにします。小さな種袋から植え切れない程の苗が作れます。実際には全てが育つ訳ではありませんが、

それでも多い時には友人にも分けたり、春になってからも蒔けるものは二回に分けて、その違いを体験してみましよう。スイートピーやルピナスの様に移植を嫌うものは、直まきといって咲かせたい場所に直接蒔きますが、多くは、蒔床で発芽したものを植え替え、そして定植し、場合によっては霜除けをします。秋に種を蒔いて冬に大きく育て、春に花を咲かせるまで水と肥料を与えながらの半年は、手間はかかりますが小さな小さな種からの変貌に、きつと見る度、心をかきたてられることでしょう。ぜひお子さんと一緒に蒔いてほしいと思います。

○パンジーのかんたん種蒔き法

平鉢の蒔き床を用意しなくても、家庭内で出るプラスチックの玉子ケースを利用すると、手軽でかんたんな種蒔きができます。ケースには排水用の穴をあけ、用土に少なく蒔いてそこでしっかり小苗を作ってしまうと、次の移植が大変楽になります。九月の上旬に蒔けば年内から元気に咲き出します。



タマゴケースの蒔き床

用意するもの……タマゴケース、金串、赤玉の小粒とバーミキュライトを等量混ぜた土、パンジーの種、細口ジョロ（調味用のケチャップボトルでも可）  
手順

①ケースのくぼみの底に、熱した金串を二、三か所ずつ

当てて排水用の穴を開けます。

②用土をくぼみに九割程入れ、種を三粒ずつ中央に重ならない様に蒔きます。

③種が隠れる位わずかに土をかけ、指先で軽く押えて種と土をなじませ、種が動かない様そつと水やりをして用土を充分湿らします。

④発芽してきたら日光に良く当てて、もやし苗にならない様に注意します。

⑤本葉が一、二枚出てきたら元気な一本を残して間引きします。間引き苗も元気なら、新たなタマゴケースに移植して育てると良いでしょう。

⑥一本になってからは用土が乾く度に、規定の二倍に薄めた液肥を水やりを兼ねて与え、しっかりした株に育てます。

⑦ケースの中でお互いに葉がふれ合う程に育ったらビニールポットに鉢上げします。

### ○球根の植え付け

球根は種よりもずつと扱いやすく、しかもチューリッ

プやヒアシンス、水仙等の様に、球根内に花芽をすでに持っているものなら確実に咲きますので水栽培も楽しめます。根と、葉と、花の変化が充分に観察できるので、水栽培は教材にもなってきました。ですが、最近の秋植え球根は種類が数え切れない程沢山あって、夏植え秋咲き、秋植え秋咲き、秋植え暮咲き、中には咲く時期が来ると土に植えられていなくても、テーブルの上や棚の上でも咲いてしまうコルチカム、ステルンベルギア等、多岐にわたっています。それぞれに植え時があって、早過ぎると地熱で球根が腐ったり、遅過ぎると球根が消耗して花が美しく咲きません。買い求める時には、球根にキズやカビが無く、大ききの割に重く感じられるものを選ぶようにします。そして袋の説明書きにある育て方の外に、花時や草丈にも注意しましょう。そして何種類かまとめて混植にすると、花時が一層楽しみになります。

(園芸研究家)

# NちゃんとY先生 (1)

自閉症児を担任した一年間の保育記録

田代 和美

Nちゃんは、自閉症の幼児である。それまで通園施設に通っていたが、年長になって、ある公立幼稚園の特殊学級に在籍することになった。Y先生にとって担任は初めての経験であった。Nちゃんを含めて二人（十一月末からは三人）の子どもを担当していた。この園では、特殊学級に在籍しながら交流クラスの活動にもお弁当や参加できる場面で参加するという形を取っている。

Nちゃんの入園時の様子を見て、また今までの経験から、一年間という時間ではNちゃんにはそれほどの変化が望めないだろうと正直私は思った。でもそうではない

事実を目の当たりにした。保育者が願いを持ち続けながら子どもの思いをくみ取ろうとして揺れ動き、それと共に子どもも揺れる。そして子どもだけでなく母親を支えていく中で自閉症と診断されたひとりの幼児に「私」が芽生えていく……。その一年間を私は遠くからちょっと見せてもらっただけだが、NちゃんとY先生の関係を何らかの形で残しておきたいと思い、Y先生の貴重な日誌をお借りした。紙面の都合上、一部を抜粋するという形だが、一年間を辿ってみたい。

四月十三日(火)

初めてじっくりNとかかわりを持たれた。慣れると言葉がたくさんでてきた。練習(訓練?)しているようのできることも多い。誘わないと一か所にじっとしてゐるので明日は戸外に出てみようと思う。

四月十四日(水)

登園時、お母さんと離れる時もスムーズである。淡々としていて私の方はやりやすいが、少し疑問を感じる。Nの中でお母さんのことをどのように感じているのだろう。少し注意して見ていきたい。何でも一つづつ順番に使うのはなぜだろう、疑問。

四月二十四日(土)

九時二〇分から十時三〇分頃まで交流クラスと共に行動した。集団に対して物おじはしない。しかしテールに置いてある友達のコップやおしぼり入れを全部自分の前に集め、自分の物と思い込んでしまう点。「いただきます」まで食べるのを待てない点が、今日これから直していきたいこととして映った。初めが肝

心と、Nの体を抱いて、いただきますまで待たせた。

「ドーナツ」「たべたい」と単語が飛び出す。少しパニック的に力を出して私に抵抗した。私は穏やかな声で「もう少しまとうね」「いただきますしてからね」などとたくさん言葉掛けをするように心がけた。許すことと許さないことを自分でしっかりもっていかなければいけないと感じた。

五月一日(土)

どこまでを許してよいのが難しい。Nの場合は一度許すと次回もよいと思いついてしまう。反対に許さないと次には我慢する姿が見られる。どこを許してどこを許さないか、私の中ではつきりさせておくことが大切だと考える。

五月十日(月)

大きな出来事は、昼食時、私が席を立ったすき前に座っていたHのおにぎりを食べてしまったことである。大きなシャケ入のおにぎりをバクバク食べている姿を見て、思わず驚きと共に笑ってしまった。「N

ちゃんだめだよ」とおにぎりを手から取ると、「おにぎり」と叫ぶ。結局全部食べてしまった。幸いもうひとつおにぎりが入っていたのでよかったが、Hには悪いことをした。予想外の出来事だったので明日からは気をつけたい。

五月十八日（木）

お弁当時、またおにぎりが食べたくて友達のを取ろうとした。断固「だめ」と言い続けると大きな声を出して涙を流し、自分の頭を叩く姿がみられた。自分のお弁当は三口程食べた程度で後は口にできなかった。パニックになっても「だめ」と言い続けたのは初めてだった。私に抱きついてしばらく離れずにいた。不安な気持ちになったのか、私の手を握り、私の顔が見えなくなると大きな声を出したりした。明日からおにぎりにしてもらうことにした。

五月二十一日（金）

今日はNの行動に大きな変化が見られた日であった。部屋での遊びが非常に少なくなったことと、遊戯

室で、ひとりでも（保育者がいなくても）二〇分程度遊んでいたこと、そして園庭にひとり出ていったことである。今までひとりでもどこかに行くことがなかった。この機会を大切にしていきたい。また踊りを踊っている年長のお友達のことにはよく見ている。できるだけ踊りをしている場面に連れて行き、同年齢の友達にも目が向くようにしていきたい。

五月二十四日（火）

私と二人で過ごす時間が長すぎるのではないかと不安がよぎる。意識して離れたり陰からみたりするようにしているが、それでもNが私に頼りすぎているように感じる。また私自身も手をかけすぎているのではないかと悩んでしまう。できるだけNが多くの人とかかわれるよう私が配慮していかなければいけないのだろう。今は、私の存在がかえってNにとって人とかかわりへの壁になっているのではとも思える。しかし一対一で十分かわることで人と接することの楽しさも分かってほしい。どの辺に自分を位置づければよいの

だろうか。

六月一日（火）

昨日部屋の模様替えをした。そして今日から夏服。

Nにとってはマイナス材料が多い一日のスタートであった。部屋に入るとしばらく入り口で中の様子を見ていた。いつもなら割とスムーズにシールはりや園服の始末をするが、今日はすぐにカセットの所に行き声をかけても動かなかった。Nの不安な思いもくみ取り、無理に誘わずにいた。すると一〇分くらいしてから帽子の始末を自分から始めた。

六月三日（木）

今日も帰り際に泣いた。遊び足りないらしい。わがままもでてきたので、やりたいことをどうしてもやろうとするようになってきた。

六月二十一日（月）

水遊びの時間が長いため他の遊びの時間が取れない。そのためか帰り際に泣く。「お帰りだからお部屋に戻ろうか」と言うと飛行機ジャングルに登ってし

まって降りてこない。今までは私が「先に帰るよ」と言って歩き出すと急いで追ってきたのだが、今日はしらんぷりで遊んでいた。門が開きお母さん方が入ってくると急に泣き出した。プールには長い時間入っていたいし、他の遊びもしたいし、私が遊びの時間配分をもっと考えていかなければいけないと感じる。





七月二日（金）

遊戯室で体を動かさし、触れ合う遊びが気に入っている。仰向けにねそべって保育者に足を引っ張ってもらうのが好きで「シュして」とせがむ。またこちょこちょも大きな声で笑い、体をよじらせている。今からこちょこちょするぞという仕草を見せると、それだけで笑っている。今は、体の触れ合う遊びをたくさんして、楽しい、おかしい、気持ちがいいという感情を大切にしていけるよう心がけたい。Nはきれいなものが大好きだ。昨日はO先生の髪飾りを見て「きれい」といったそうだ。感情的な言葉が出たので驚いた。

七月七日（水）

遊戯室で体を使って遊んだ。私が高児とかかわっていると突然泣き始めた。初めてのことだが、やきもちをやいたらしい。感情が外に出るようになってきて、嬉しい。

七月十七日（土）

木金土と二階倉庫で楽器ができなかった。今日はど

うしてもやりたいようで、何度も私の手を取って連れていこうとする。今日はゆっくり遊ぶ時間もとれないし、またスイカわりに参加させたいという気持ちもあったので倉庫には行かなかった。しかし結局はスイカわりには参加できず、Nは部屋の水道で水遊びをしていた。やはりあせらずNのペースを大切にしていけることが大切だなあとここにきて自分自身反省した。

七月十九日（月）

二階倉庫で楽器遊びができ、満足したようであった。私が違う方向をむいてNに背を向けていると、そばにきてトントんと背中を叩いた。園庭でぶらんこと一緒に乗ったり、ジャングルジムのまわりで追いかけてっこをした。ジャングルジムの中に私が入ると、Nも初めて中に入ってくる事ができた。遊びの中で少しずつできることを増やしていってあげたい。

九月一日（水）

笑顔で小走りに玄関に入ってくる。目も合い抱きつ

いてくる。夏期保育の時は目が合わずそわそわした感じだったので今日もそのような様子を想像していた。まったく違った感じだったので驚くやら嬉しいやらであつた。今朝は家族の誰よりも早く起きていたとのことであつた。先生方の名前やほし組の友達の名前を覚えていた。始業式の最中にほし組の男児の顔をひとりずつまじまじと見ては、嬉しそうに私の所に走ってくる。特にH君を見付けたときは笑顔で何度も見ている。

九月六日（月）

二期期になってテープを聞くことがなくなった。集会時、ディズニー体操がかかっていると、すぐ踊り始めた。今までよく見ていたんだなーと感心させられた。やりたい気持ちになれば、できるものも案外多いのかも知れない。ホールでにじ組さんの友達を作ったつながった積木を渡す。意外なほど喜び、片付けにやるまで続けた。明日も誘ってみようと思う。

九月十日（金）

体調があまりよくないためか一日中動きが悪かった。指示の通りも悪くなっているように感じる。私のNに対する願いが高すぎたり、強すぎたりして口うるさくなっているのかもしれない。Nに対して何を狙って接していけばよいのか、今また悩んでしまう。できないのは障害だからだが、それだけで片付けてしまうこともいけない気がする。小さなステップでも進歩はあるのだから、それを出しやすいうような援助が必要なのだろう。来週のNとのかかわりが無理なく自然な形でできればよいと思う。あわてず、待つことの大切さを思いださなくてはいけない。

九月十三日（月）

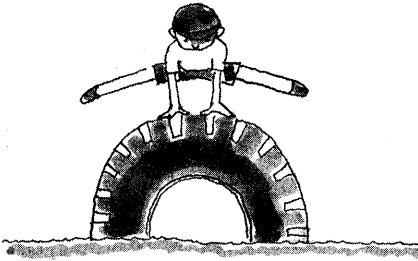
無理をせずNの動き、思いを大切にしていこうと思つて接すると、私自身に心のゆとりができ、Nもいい状態で一日を過ごすことができたように思う。指示や言葉かけに対してスムーズに反応できたのも、私の接し方の微妙な違いが関係したのかもしれない。

九月十六日（木）

今日はべったりとくっついていることが多かった。  
Yの相手をしていると泣きそうになったりする。最近  
お母さんにも進んで手をつなぎに行くようになってい  
る。

九月十七日（金）

すこしかわいそうな感じもするが、ほし組で一緒に



できるところはやらせていきたい（運動会の練習）。

九月二十八日（火）

昼食時、隣の子の林檎を取ろうとした。「K君の林  
檎」といって返した。その後も食べたそうにしていた  
が、どうにか我慢していた。以前に友達のおにぎりを  
食べて止められたときは、パニックになったが、今回  
はパニックにならずにいた。考えると、二期期になっ  
て自分の頭を叩いて怒ったり我慢したりすることがま  
だないことに気づく。

九月二十九日（水）

今、ぶらんこが楽しいらしい。何度も「ぶらんこ  
いっしょに」とねだる。最近お母さんの所に嬉しそう  
に向かっていく。本当によかったと思う。二週間前く  
らいからお帰りになるとお母さんが来ているか窓の外  
を眺めたりする姿が見られ始めていた。今日はお母さ  
んの姿が見えると、上履きのまま窓から出て抱きつい  
た。今までそういう行動が少なく、気にかかっていた  
のだが、本当に嬉しいことだと思う。うれしいとか悲

しいとか寂しいといった感情が外に出せ、できれば場面にあった感情表現ができるようになってほしい。Nにとっては難しいことだが、願いはもっていききたい。

十月一日～八日までN休み(母の体調不良)

十月九日(土)運動会

Nの表情が出なくなっている。目もなかなか合わない。Nの好きなスキンシップのとれる遊びをしても今日は笑わない。最近はけらけらとよく笑っていたのに競技も無表情でやるものが多く、ただやっている感じであった。今日はなるべくNの動きたいように動かせてあげるよう心がけた。出場競技以外の時は校庭の後ろのタイヤの辺で遊んだり、お母さんを交えてNが安心できるような場で過ごした。また休みが入り水曜日からの様子が心配だが、Nの思いに添ってまた笑顔が出る日を待ちたい。

十月十八日(月)

九日ぶりにあった。玄関の中に入ろうとせず私の方から迎えにいった。目も合わないが、それよりも顔を

背けるほどだった。お母さんから昨日便器に座って大便ができたと聞き、もう驚いてしまい、「よかったね、よかったね」と何度も言った。私の喜ぶ気持ちが伝わったのか、オーバーアクションが楽しかったのか笑顔が出始めた。お母さんもNの前でおむつをはさみで切ってゴミ箱に捨て、便器でできるように努力したそう。時間はかかるがいつかできるようになってほしいと思いつながら続けていくことが大切なのだと思う。

十月二十一日(木)

一緒に園庭に出て私だけ遊戯室にYを呼び、手を振った。Nも私に気づき笑っている。ひとりで靴を履き替え遊戯室に上がってきた。これには少し驚かされた。マーカーペンで果物とそのジュースを描くように私に要求する。黄色をとって「バナナ、バナナジュース」というように。端から選ぶことが多い中で今日のようにNが自分で考え選ぶ姿を大切にしたい。

十月二十七日(水)

登園時から全くの無視状態であった。どうしたのだろうか。私の中で疑問を持つ。結局一日お部屋の中でカセットを聞いているだけであった。私の方から何かに誘っても無表情で乗ってこない。体調が悪いのか、カセットが聞きたいのか、人が煩わしいのか、いろいろ考えられるが、はっきりした理由は分からない。昨日カセットテープを貸してあげなかったので、今日は何なんでもテープを聞こうと思って登園してきたのだろうか。めずらしく、いっしょにいても私が楽しめない。Nが相手にしてくれないと私の方がつまらないなんて、なんだかおかしくなってしまう。結局、私の方がNに楽しませてもらっているのだなあと感じてしまう一日であった。今日はカセットテープを持って帰って行った。幼稚園ではできるだけ家でできないような遊びをさせてあげたいので、カセットの持ち帰りは許そうと思う。

(続く)

初めの頃のY先生の記録には、Nちゃんに対して自分

はどうすべきかを考える責任感が前面に出ている。自分だけでなく、多くの人との関係の中で育つことがNちゃんに必要なだと、一步引いたところに自分の身を置こうとしている。しかしNちゃんは自分の思いを汲み取ろうとしてくれ、自分のペースを守ってくれようとするY先生に母親に対する乳児のように一体化していく。そしてY先生との関係の中で、Nちゃんの「私」が少しずつ芽生え始めていく。それがわかるからY先生はなおさらNちゃんの思いを大切にしたい、しかしNちゃんの世界を広げてもあげたいと揺れる。Y先生がNちゃんをひとりの人間として尊重しているからこそこの揺れは生じるのだろう。相手を尊重できるためには相手から自分も楽しませ、学ばせてもらっていると自覚することが必要なのだ記録を読みながら改めて思わされた。

(お茶の水女子大)

## 読み物のページ

# 取り戻された子ども時代

李相琴・著 『半分のふるさと』の場合

K・M・H

『半分のふるさと』は、李相琴（イ サンクン）さんの子ども時代の回想記です。六十の齢に達して、漸く筆にすることの出来たこの一冊の本で、李さんは、自分の子ども時代を取り戻すことが出来ました。出生地として「ジャパン」と記さねばならず、そのために海外の空港などで「アー・ユー・ア・ジャパニーズ？」と問われる心外さ、躍起になって「ノー。アイ・アム・ア・コリアン」と訂正せねばならない煩わしさ……。著者は、祖国と出生地を異にすることの不自由さに、とりわけ、出生地が祖国を植民地化したもと支配

国であることの不条理さに、長らく耐え続けて来たのでした。

従って、李さんにとって「日本で過ごした子ども時代」は、出来ることなら消し去ってしまいたい忌まわしい過去だったかも知れません。しかし、六十歳という人生の節目に立って、祖国である韓国のどこを探しても自身の子ども時代が浮かび上がっては来ないことに気付いたとき、彼女は、今まで語ろうとしなかった幼い日のことども、日本での生い立ちのあれこれを綴ってみようと決心したのでした。

筆を取り、言葉にすることで、長い長い時間、記憶の奥深く眠らされていたあのことが色鮮やかに蘇ってきました。いま、李さんは、自分の根っこであった子ども時代と、その舞台であった日本とに改めて対面し、それを「半分のふるさと」として受け入れることが出来たと言います。そして、同時に、子どもの目で捕らえた朝鮮半島と日本との歴史の一面が、証言出来たと感慨深げです。さらにもう一つ、この本は、日本人社会という支配者集団のなかで、民族の誇りを失わなかった亡きお母様への鎮魂歌でもあるようです。多くの人々を感動させ、複数の賞を受賞したのも、これらのもろもろが原因だったでしょう。

李さんは、韓国の最高の名門と言われる梨花女子大学の教授。同国の幼児教育界の最高指導者でもあります。彼女は、一九三〇年、広島県の可部町で、在日朝鮮人（現在の韓国）の子どもとして生まれ、日本の小学校に通って十五歳までを日本で暮らしました。一九四五年、第二次大戦が日本の敗戦で終わり、朝鮮半島は植民地支配から逃れ、南北に分



かれて独立します。李さん一家は、故国を渴望していたお母様の強い希望で、南、つまり韓国への帰国を選択するのですが、日本式教育を受け、すっかり日本少女になっていた相琴さんには、意に反した辛い帰国だったようです。何しろ、朝鮮語がしゃべれない、日本で「チョウセンくさい」と蔑まれた自分たちが、今度は「チョッパリ（日本人への蔑称）くさい」といじめられるのですから……。私たちの血統のルーツへの帰還は、虹色でもバラ色でもない、イバラの道から始まった」と、著者は綴っています。

「私は日本人ではない、韓国人だ」と主張しつつも、「子ども時代」という根っこが、韓国はどこを探しても見当たらない。そんな李さんにとって、日本の広島は、どんな幼年期を用意してしてくれたのでしょうか。李さんの瞳に蘇ったのは、六畳と四畳半の二間だけトタン屋根の、玄関もない小さな家でした。トタン屋根を叩く雨の音が、小降り、大降り、細かい雨、太い雨、みぞれ、あられなどと、弱く、強く、楽しく、面白く聞き分けられて、はた目にはみずぼらしかったであろうトタン屋根が、子どもの自分には「楽しい音の魔術師」だったと言います。

植民地朝鮮から移住してきた貧しい労働者夫婦が、初めて建てたささやかな、しかし彼ら一家にとっては掛け替えない住居、それが、李さんの記憶に蘇ってくる最初の暮らしの場だったようです。両親の喜びをそのままに受けて、幼い李さんの目にも、すべてが輝いて見えたのでしょう。夏は暑く、冬は寒いトタン張りの屋根までが、こんな楽しい夢を

紡いでくれたのですから。

内と外がただ一枚の障子で仕切られたその家には、窓のついた壁もなければ縁側もありませんでした。近くの日本人の家に遊びに行つて、窓から外の景色を見たときの感動を、李さんは綴っています。「窓」という四角い小さな視界から眺める空や雲のただずまいは、いつも見上げるそれらとは違って、何とも新鮮に見えたと彼女は言います。以後、李さんは、障子を半分ほど開けて適当な空間を作り、食卓や勉強机に使われていた飯台を横倒しにしてそこを区切って、「臨時の窓」を作りました。飯台の架設窓にびったりとくっついて、飽かず戸外に眺め入る幼い姉妹の姿……。何とも可憐で、微笑ましく、かつ、胸を打たれるような光景ですね。窓作りは、なぜか「雨の日」の遊びだったと言いますから、二人が眺めていたのは、いつも、雨景色だったのでしょう。

その粗末な新居のなかには、姉妹がこっそりと鑑賞する秘密の宝物もしまわれていました。李さんのお母様が、小さいとき故郷ではいた朝鮮風の「花靴」、コムシンのような舟の形をした履物で、花刺繡のある絹ばりの靴でした。孤児となって日本に流れてきた十三歳の少女が、たった一つ、こっそりと荷物の中に忍ばせた美しい思い出、同じ少女として、二人の娘たちはその秘密を共有しようとしたのでしょうか。花靴の鑑賞は、お母様の留守中に限られ、そっと眺めて急いで元どおりしておくのが常だったと言うことです。

李さんにとって、お正月の思い出も、また、複雑でした。近所の日本人たちは新曆のお正月を祝います。振り袖を着たり、ポツクリを履いたりして、新年に華やく子どもたち：

∴。お母様の手作りの毛糸の晴れ着を着せて貰っても、李さんの心は晴れません。門松もしめ飾りもなく、お餅つきもしない我が家の、何と惨めで侘しかったことか。「ポケットに手をつっこんだまま、広場のかたすみ、しょんぼりたたずんでいた幼い日の私の姿が思い浮かぶ」と、著者は綴っています。それに代わる旧正月の賑わい。集まってくる同胞たちの前で、この日のために密かに準備した朝鮮風のご挨拶、それを誉められて頬を染めたというのも、李さんならではの思い出でしょう。

「李相琴（イ サンクン）」という朝鮮の名前は、幼児を呼ぶときの愛称としては、「クマ」となるのだそうです。李さんの場合、そのクマが「キマ」と訛って、「キマちゃん」と呼ばれていました。彼女の記憶に蘇って来た「キマちゃん時代」は、小学校入学後の思い出と比すとき、概して楽しく幸せに彩られています。とりわけ、働く母親のために設けられた私設の仮保育所、というより朝鮮人相互の互助組織でしょうか、「小山のアジメ（おばちゃん）」の家の子ども集団で過ごした日々は、のびやかで活気に満ちていました。そこは「朝鮮人チビたちの楽園であった」と、著者は回想しています。

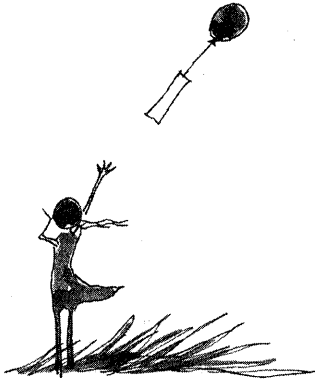
ただし、このお正月風景のように、彼女には、幼いながらも二つの文化のはざまでゆすぶられるという、特別の幼年期が用意されていたのです。他の子どもとは違うという、こうした生活のあれこれ……。日本人として暮らすことを強制されながらも、朝鮮人としての誇りや伝統を守ろうとする民族の気概など、理解すべくもない幼い女の子の主観世界に、それらは、どんな意味合いで受け止められたのでしょうか。でも、いまの李さんに残

された痕跡としては、その複雑な幼児体験は、必ずしもマイナスとのみは位置付いていないらしい。なぜなら、彼女の、深みのある陰影に富んだ人柄は、どうやら、こんな単純ではない子ども時代によっても培われているらしく思えるのですから。

小学校に入ってから李さんには、辛い毎日が続いたようです。「チョウセン、にんにく、ブタの子」などと罵声を浴びせられ、嘸し立てられ逃げ帰った日々……。幼児だった「キマちゃん」に訪れた平和で牧歌的な時間は、小学生という制度の中で無残に破壊されてしまったのでした。いじめられ殴られて瘤の出来た帰り道、妹さんと川の土手に座って少しでも気分を落ち着けてから、歩きだした二人が手をつないで歌ったのが、「夕焼け小焼けで　日が暮れて」だったというエピソードに、私は胸が痛みます。なぜなら、朝鮮人のゆえに蔑まれ、殴られませんでした姉妹二人が、傷ついた心を励まそうとして歌を歌おうとしたとき、口をつけて出てくるのが日本の歌だったと言うのですから。日本語で教育され、日本の歌しか歌わされず、本名を捨てて日本名を名乗るよう定められなどして、日本人になることを強制されながらも、決して日本人とは認められない彼女たち……。このエピソードは、そんな被支配民族の悲劇を、「子ども文化」という形で凝縮して見せてくれているのです。

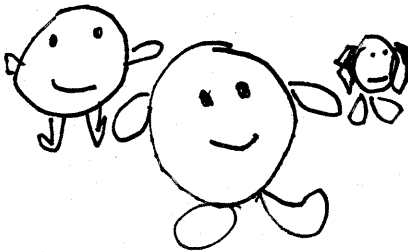
しかし、この本で李さんが言いたかったのは、そんな過ぎた日の恨みごとではない。彼女は、「あとがき」の中で、「真珠は身を切る痛みを通して珠を結ぶ」と言う一文を引いて

います。李さんの子ども時代の傷跡が珠となって、多くの人々のもとに届けられて欲しいという願いが込められているのでしょう。そして、とにもかくにも、著者自身、隠蔽されていた「幼い日々」を取り戻したことでホッと安堵感に浸っているのを感じるとき、読者である私どももまた、しみじみと心が温められ、懐かしい安らぎの気持ちに捕らえられるのではないでしょうか。



# 今も迷いながら

高橋 和仁



私は、幼稚園教員養成過程卒業後三年間小学校に勤めた。その後本園にきて幼稚園教諭として二年。

まだまだ経験の浅い未熟者だ。園に来て一年目はまだ二か月も経たないうちに三百人近い保育関係者の集まる研究会で、地に足の着かない保育をしてしまった。案の定、分科会でも攻めに攻められ、満足に答えられないという、苦しい経験をした。

しかし正直に感じることは、子どもたちとの生活は、研究会で言われたような「良い保育」とか「適切な援助」などの言葉では語り尽くせないものがあるということだ。今なら分科会での指摘を少し違う角度から眺めることができるような気もする。ただ毎日の生活は、相変わらず迷いの連続である。

ここではそうした迷いの道中で私自身が感じたことと、悩んだことを正直に述べてみたいと思う。

## ◎保育者は真面目なんだなあ？

私は保育者として不真面目なのかなと思う時があ

る。著名な大学の先生の講演会等で、時にはこの人  
保育現場のことを本当に知って話しているのかなと  
思うような内容でも（私が未熟でそう思うのかもし  
れないが）、周囲の保育者たちが、講師の先生の一  
語一句を逃さぬようにペンを走らせている姿に圧倒  
される。そして私も、ついペンを走らせる真似をす  
ることがよくあった。こんな時私はいつも、周囲の  
保育者の真面目さに敬服してしまふ。

新参者の私にとって保育とは、子どもたちとの間  
に繰り広げられる生活感あふれる世界であり、それ  
だけに、口では表現できないような複雑な感覚にい  
つも浸かっている。とてもすすきりしたものだとい  
はない。私にとっても子どもたちにとっても、一瞬  
一瞬が勝負で敵しいものがあると感ずる一方で、喜  
びや面白さもいっぱいある。ある時は、私自身の生  
き方までも考えさせられる場面にも出会う。時とし  
て、たじろいでしまうこともある。次にあげる五歳  
児の事例は、そんな子どもたちのやりとりである。

＊

十月二十九日（平成四年度「もり組の記録」より）

展覧会で使う石を拾いに川の上流までいく。そこ  
で健弘が全長十五センチほどのトカゲを見つけた。  
健弘は「持って帰る」と言う。隣で、貴文と基樹、  
香織が口論していた。もう香織は泣いている。

健弘の捕まえたトカゲを、貴文は『園に持って行  
こう』と言ひ、基樹と香織は『絶対に自然に返すべ  
き』との立場。互いにとても熱っぽく自分の主張を  
する。「だって、家に持って帰ったって死んでし  
まうかもしれないじゃん」

「ちゃんと飼えばいいじゃんか」

「ちゃんと飼うってどういうこと？」

「ちゃんと飼うって、餌あげたり水あげたりするん  
だよ」

「でもかわいいそうだよ、だってとかげだってこうい  
うところがいいんだから」

「じゃあ捕まえることが何でも悪いんか？」

「おお、そうだよ」

「じゃあ、どうして綱とかがあるんだ？ どうしてだよ、言ってみろよ。」

とても真剣なやりとりであり、それぞれの主張にももっともなところがあつて、私はどうしたらよいのか迷つてしまい、この議論には入らずにいた。

\*

このように子どもたちは、もう大人も意見が分かる問題を時によつて考えようともしている。そんな時私は、誰に頼ることもできず、そこから逃げることもできない。それはまた、どちらが正しいというものでもなく、私自身の価値観に頼つても解決できないことにも気付かされる。

保育者は、じつはこのような場面に出会う時、自分が試されるような恐ろしさをどこかで感じ、悩み考え込んでしまうのではないか。本当に保育者が困つてしまうようなこういふ疑問にこそ、納得いく答えを研究者に出してもらいたいような気もする。

保育者は、真面目に聞くことよりもむしろ、真面目に問うことが時として必要なのではないだろうか。

### ◎『丁寧な保育』って、どんな保育？

私はどちらかというところばらな性格だ。いやまったくずぼらだ。先日の研究会でも「もう少し丁寧な保育をしたらどうか」という指摘を受けた。「こっちの方で子どもが暴れているのにそのままにしている」とか、「こんな（寒い）日に子どもにも裸になることを許した」とか、「子どもが集まる時に、集まらないまま集会をした」とか、本当に雑さが目立つ保育だったようだ。

私自身「そうだな」と反省しながらも『丁寧な保育』って何だろう、と半分参会者の意見に疑問を持ちながらも言われるままに聞いてしまった。何だか自分の考える「丁寧さ」とは違っている気がしたのだが。

保育の「丁寧さ」って何なのだろう。



次は、今年の研究会当日の出来事である。

私はこの時、そばで見ている一つのドラマを見たような気がした。

\*

五月二十日（平成六年度「ばら組の記録」より）

康夫はこの四月に四歳児に入ってきた。入園当初から、気持ちが不安定なのか、泣くと私に「抱っこ抱っこ」とスキンシップを求めてくる。また、自分の思うようにならないと、誰にでもパンチをするので、よく見ていないといけない子でもあった。

今朝は、康夫の滑りだしも順調。大形積み木を並べて自分の橋や道を作っていた。機嫌もよさそう。しかしその状態は、牛乳タイム後に変化する。牛乳を飲み終わるなり「先生、抱っこ抱っこ」と来た。仕様がなく抱っこしてあげると、次の遊び場を見つけたようだ。「先生おろして」と言うなり外のマットに走って行ったが、外のマット行くなりポコッとそこにいた一夫をたたいて「ここはダメ、ぼくの所

だから」と言う。不意に後から頭を叩かれ一夫は泣いてしまう。私はそれ以上康夫をそこにおかず部屋に連れていった。

すると今度は、ブロックで作ったピストルを持った知雄に「どうしてお前だけそんなん持ってんだ」と言い、知雄を突き飛ばし、それを取ろうとした。私は康夫をこれ以上放っておくとおとなしい知雄が一方的にやられるだけだと思い、私は割って入った。すると康夫は反省もなく、また「抱っこ抱っこ」とごねた。兎のいるところに連れていくと、やはりさっきのマットが気になるらしく「あそこに行きたい」と言う。それに「抱っこでいく」との甘えぶり。やっとおろして、マットのところに自分で行かせた。またも女の子がいるのをけちらかし、「ダメダメここは僕のところだからダメ」と言う。

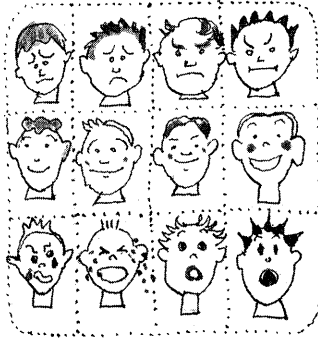
そこは、女の子たちが平均台から飛び込むようにして海と飛び込み台をイメージして使っていたが、康夫が暴力を奮うので、みんな逃げていった。そこ

に慎介がやってきた。「入れて」と普段あまりしゃべらない慎介が機嫌良さそうに入ってきた。すると康夫が「ダメ、ダメ、ダメ」と自分がまだ強いと言うような調子で言う。慎介は一遍に不愉快そうになる。すぐ後に優作と諭も「入れて」と言っていて来たが、そこでも「ダメ、ダメ」の康夫である。

慎介は「とうしてダメなんだや」とそのわけを康夫に問いたしたが、康夫は「ダメ、ダメ」の一点張り、ついにはこれまでと同じように手をだして慎介に殴りかかった。一発は見事に慎介の背中に入ったが、その一撃で慎介は怒り、「とうしてダメなんで」と大声で言って康夫にかかっていった。この時だけは、私もその喧嘩を止めにかかろうとは思わなかった。慎介の方が康夫より喧嘩が強い。これまでの康夫が起こしてきた喧嘩と違う結果が得られそうだという読みがあったのと、ここで康夫はいい勉強をするのだろうと感じたからである。

慎介は「とうしてダメなのか言わなきゃわかん

ねーよ」と康夫を投げ飛ばす。康夫は泣きながら「ダメー、ダメー」の連発である。最後には「みんなのそこじゃねーか」と慎介は言いながら康夫を投げていたが、康夫には通じたかどうかはわからなかった。



\*

この事例が研究会の格好の議論のテーマとなりそうだと感じていたのだが、なぜかあまり話題にならなかった。私は、子どもたちが園の中で自然に学び合う場を保育者としてどのように考えているのか話し合ってみたかったのだが。

自分が寒いと思ったら、子どもは自分から水に入るのをやめるし、靴をはきたくなれば、自分から履くであろう。少々乱暴な考えのようだが、子どもはそこから学んでいくのではないかと思う。先にも述べたが、保育者は真面目な人が多く、子どもたちへの速効性や同一性を考え過ぎる気がする。しかしどうだろう、私たちだってそんなにすぐに変わったり直ったりできるであろうか。痛い目にあって初めて考えるということはないだろうか。自然のままというのは、そのまま放っておくことでなく、子どもの学びの効果的で実質的な学びを求めるには、そのままのように一見しておくことが、ある意味では大切

なのではないだろうかと思うからだ。『丁寧な保育』は、その子の育ちの中で大切と考えるものを、ごく自然の中で子どもが偶然に出会うものを通して学んでいく過程を、注意深く見守りながらフォローしていくことにあるような気が私にはするのだが、どうであろうか。

### ◎真面目に問い続けること

最近、私が求めていたものへの答えを、子どもたちが教えてくれることに少しずつ気付き始めた。外にばかり師を求めてきたが、じつは私のすぐ目の前に師がいることによりやく気付いたのだ。

私にとって、子どもたちは一緒にその場を生きる同胞であり、時には無理難題を考えさせる師でもある。しかしお互いに考え、悩みながら日々を過ごしているもの同士なので、相手の気持ちもよくわかるように思う。困っていることはみんな解決しようとする気持ちだが、私と子どもたちの両者に自然にわ

いてくるのだ。

次にあげる事例は、子どもたちと共に考え合ったものである。(紙面の都合で、簡略してあるが)

\*

(平成五年度「もり組の記録」より)

- “せんせい さようなら……………①  
みなさん さようなら……………②  
びよこたん さようなら……………③  
インコさん さようなら……………④  
きんぎょさん さようなら……………⑤  
〈ともぎ〉せんせい さようなら……………⑥

(注)このへ内はその日の当番の名前

これは私たちクラスのクラスのお帰りの挨拶だ。年度当初は、“せんせい さようなら、みなさん さようなら”というばらぐみ(四歳児)からのままのフレーズだったが、五月ごろから、その日の当番の人にも言ったら面白くて楽しいし、“せんせい”と言われた人も何だか気分がいいということで⑥が加わ

りずっと①②⑥の形が続いてきていた。

それが、飼っていた兎(名前はびよこたん)が死んで埋葬した日(十二月十三日)から、「びよこたんにもさよならを言おう」という声が出て、「びよこたんさようなら」が加わった。そのうちに今度は、「びよこたんにさよなら言うなら、インコや金魚にもさよならを言わなくっちゃ」という意見が出て、④⑤のフレーズも加わる。

子どもたちのほとんどはそれほど抵抗なく、むしろ唱えるように長い台詞を言うのが楽しいとさえ感じていたようだ。しかし、ある日のお帰りの会に事件は起こった。

二月十六日

成寿が突然手を挙げ、「あのさ先生、お帰りのあいさつ長いからさ、びよこたんとかのところなしにしようよ」と大きな声で言った。

その言葉を聞いたとたん「ええーっ」と大きな

ブーイング。「どうしてそんなことを言うんだや」とか「成寿がなんで勝手に決めるんだや」という声もそれに交じって聞こえる。しかしもう降園時間もきているので、成寿の提案については明日みんな考えてよということにして、その話を打ち切った。

二月十七日

「成寿君前にきて」「みんな昨日成寿君が言ったこと覚えてるかな」「覚えてるー」

「なあちゃんは何言ったんだっけ？」

「あのね、お婦りの挨拶が超、超ー、長いんだよ、だからびよこたんとかインコとかのところカットしたらしいの」

「ええー」また昨日と同じブーイング。何人かの子がすぐに反発してぶつぶつ言い始める。手を挙げるように促すと、五人の子が手を挙げ、美保を指名すると、いきり立ちながら強い調子で言う。

「あのさ、成寿君はそういうけどインコとか金魚とかがかわいそーじゃん、それにびよこたんだって死

んだってちゃんと見ているかもよ」

「そうだよそうだよ」と美保を支持する声しきり、もう一人明菜に聞く。明菜も感情をこめて、

「成寿君、かわいそうだと思わないの、びよこたんだって天国からちゃんと見ているんだよ」

聞いていた成寿がすぐに反論する。

「だってさ、インコだって金魚だって人間の言葉、わかるわけじゃないじゃん。インコはインコ語だし金魚は金魚語だから、さよならって言われたってへバカくそまぬけ」って言われてると思ってるかもよ」それを聞いたみんなは一段とエキサイトする。友弘が「成、おまえかわいそうだと思わのんか」と大声で言った。

私は、思いがけないみんなのエキサイトぶりに少々驚いて、時間の経つのも忘れた感じだった。真向から議論が対立していたにもかかわらず、みんなでひとつのことを必死になって考えていたことで、逆になぜかクラスがひとつになったようにも感じら

れた。

二月十八日

昨日に引き続き、互いにゆずらない平行線の議論が続いた。しかし「挨拶が長い」ということだけは了解する者がでてきた。

二月十九日

いよいよ今日で、四日目。みんなでどうしたら納得いくか、真剣に話し合った。

明菜が突然「先生いいこと思いついた」と手をあげる。「あのさ、①と②のところあわせて『先生みなさん さようなら』とすれば」と新提案。すると、それがいいということで、「すごい」の拍手が起こった。それから次々に意見が出て話し合わせ、ついにみんなに承認される挨拶の言葉が完成したのである。

《改造後の挨拶》

“せんせい みなさん さようなら……(1)

びよこたん インコさん 金魚さん さようなら

“○○”せんせい さようなら”……⑥

四日間にわたる、延べ三時間の白熱した議論の後にできた私たちのクラスの挨拶である。

\*

このように私は、子どもたちに助けられながら生活している。いつもわからないことを子どもたちや園の先生方に正直に言うようにしている。自分がわからないものを正直に問い返してみたり、自分なかも問い続けていくと、何か保育にとって大切なものがみえてくるような気がする。

知ったかぶりをしないで“真面目に問うてみる”気持ち、そこに保育の原点があるように、今は思っている。

(新潟大学教育学部附属幼稚園)

## すずめの学校

松井 とし

「これまではすずめの学校でしたけれど、これからはめだかの学校です。」ある講演会の冒頭、幼児教育一筋の長い経験を生かして今は保育者養成の短大で教鞭を取っていると、いうその教授はこのように話し始めた。

すずめの学校の先生は「鞭をふりふりチイパッパ」である。これまで、幼稚園の先生は、飴と鞭を使い分け、幼い子どもを相手に学校ごっこひな型を演ずるもの、とイメージする人たちがいたとしても、教育要領が改訂され四年も経過し、しかも子どもの身近にあって共に生活をつくってきたであろう人のたとえに「すずめの学校」が使われたことを私はとても不快に思った。聞くところによると、従来の教育をすずめの学校にたとえ、「誰が生徒か、先生か」というところをとらえてこれからの教育をめだかの学校にたとえたのは、小学校の生活科が導入された頃にそのあり方を指導する人たちだったらしい。これが

らの幼稚園教育の真髓を語ろうという時に、他の領域の人が使ったこのようなたとえを借りなければならぬところがいかにも悲しい。

またこのようなこともあった。ある大学附属幼稚園主催のシンポジウムの席で、若い臨床心理学者が次のような質問をした。「幼稚園教育は難しい。たとえば、けんかの場面で先生が仲裁に入る時と、子どもたちに任せて黙って成行きを見守っている場面がある。同じような二つの場面で先生のかかわり方が違うのはなぜか？」それに対して、やはりその幼稚園での長い保育実践の後、短大で保育者養成をしているというベテラン教授は「それは時と場合によって違うので、一概には言えない」とだけ答えた。すると「残念ながらやっぱり幼稚園教育は経験と勘によって成り立つのか、と思わざるを得ない」と質問者。このかみ合わないやりとりを聞いていて、幼稚園界が抱えている問題に心が重くなった。保育の瞬間々々には無意識のレベルで行動することが多いが、保育者は省察することによって幼児理解を深めている。自身の行為の源に迫っていくこの時の振り返りが、これからの幼稚園教育の質を高めていく上で不可欠なのである。借り物ではなく、仲間同士でうなずき合うのでもなく、実践の中から真の専門性を紡ぎ出し、他の領域の人たちにも理解されるように表していくことは難しいが、これからは避けられない課題である。

(元・幼稚園教諭)



# ある日の育児日記から

佐藤 和代

(45)



保育園の、有のクラスメートが、亡くなりました。突然死、ということでした。金曜日に元気な姿を見たのに、月曜の朝、園の玄関に訃報がはり出されていたのです。

あまりの突然さに混乱して、二度三度と読み直していたとき、職員室で泣いている先生の姿が目にはいりました。一歳児クラスの子どもたちは、何もわからず、いつものように先生の笑顔を求めてくるはず。あの先生は、今日一日を、どうやってすごすのでしょうか…。

小さい子の命とは、何とはかないのか。私も一日

中そればかり考えて、仕事になりませんでした。その夜は夜中に何度も有の寝息を確かめました。あ、生きている。大丈夫。

そして二三日、私は妙にやさしい母親。だっ  
て、生きていると思うだけで、涙が出るほどいと  
しいんだもの。叱ったりなんかできない。

でも、お通夜の手伝いに行つて、夜遅く帰宅した日。起きて待っていた妻と有は、なかなか寝よ  
うとせず、おみやげのお菓子をポリポリ。12時近



くなるとさすがに私もあ  
せてきて「いいかげんに  
しなさいっ」とどなって  
しまいました。生きてるだ  
けで嬉しい、という想いは  
忘れたくないけれど、日常  
は日常、でしょうか。反省。

# 児童館に集う子ども達

高橋 あき子

今日も児童館はにぎやかだ。

玄関のドアを開けるとすぐ、床（とこ）を囲んで  
ベーゴマをまわす五年生たち、くつつきボールを力  
いっばいに目掛けて投げ合いをしている三年生グ  
ループ、小さな玉突き台で遊ぶ五年生の女の子た  
ち、布ボールでサッカーをやっている六年生や紙工  
作をしている一、二年生たちも奥に見える。児童館

に活力がみなぎっている時である。

たまに、子どもが少なくて館内が静まりかえって  
いるような日があるが、そんな時の児童館には人気  
のないうらぶれた劇場のような虚ろなわびしさが漂  
う。子どもたちもきつと、そんな日の児童館には、  
入るのを躊躇するような雰囲気を感じるのではない  
かと思う。

どういうわけか、学校は建物だけでも『学校』という感じがするけれど、児童館はたとえひそかにでも、また、歓声が響きわたっていればなおさらだが、子どもがそこに遊んでいて初めて生きた『児童館』らしくなるような気がする。

とはいっても、子どもが元気に遊ぶということもこの昨今では、なかなか大変である。児童館に来たら、思う存分遊べるだろう、なんていうわけにはいかないのが残念ながら現実だ。子ども自身が遊び方が下手だとか、遊びを知らないとかいうのは、また別の大きな問題だが、その前にも大きな障害が結構ある。

都内の児童館の多くは、保育園や敬老館、その他の社会施設等と併設で、児童館は必ず、二、三階に追いやられてしまっている。だから、玄関までたどりつくのに階段通路を何回も曲がって登らなければならぬなんていう所も少なくない。そんな所は児

童館の前をたとえ通ってもにぎやかな声など聞こえないから、子ども自身も「きょうは児童館であそぼう！」といった意気込みがないと、ちょっと寄ってみようなんていう気楽な気分では入りにくいなんていうことも結構あるだろう。

その上最近、近隣の住民から、中で遊ぶ子どもの声やピアノの音、ボールの跳ねる音が騒がしいという苦情が、方々の児童館に持ち込まれるようになった。子どもの遊び方が以前よりダイナミックになったとか、児童館を利用する子どもの数が増えたというわけではないので、たぶん、密集化したり高層化したりしている住宅事情や、週休二日制などの生活スタイル、あるいは高齢化などが影響しているのではないかとも思われる。

去年のちょうど今ごろの事だったろうか、電話が鳴るので、

「はい、児童館です」

と勢いよくでると、

「いつも言ってるんだけどねえ。広場でボール遊びは、やらないでくださいよ！ あれ、はねて、うるさいんだよ。」

と、不機嫌な口調で怒鳴る抗議の声である。

私はあまりの理不尽な物言いに呆気にとられてしまい、ボール遊びをしているのは団地の子どもで、児童館利用中では無いことなど思い起こせず、ひたすら低姿勢でお詫びをしたのであった。

その広場は、都営団地の真ん中にあるので団地の集会所が一隅にあるほかは、周囲を成長した木々にかこまれ、児童遊園につきものの既設遊具が全くなくて、いかにも子ども集団の遊び場にふさわしく見えた。私は、その児童館に着任してまだ間もないころで、こんな良い広場がすぐ隣にあって恵まれた児童館だと思っていた矢先だった。だから、その電話の

後暫くは、なんて自分勝手な大人かと憤懣やるかたない気持ちがつものる一方だった。

しかし、冷静になってみると、日中とはいえ、子どもの歓声やボールの音などは、建物に反響したり壁をはいのぼったりして確かに神経を苛立たせることもあるだろうと思いが及んだ。だが、だからといって、子どもの遊びをやめさせてよいものか。せっかく良い広場があるのに子どもが遊べないのは勿体ないのひとことであつた。

子どもにとっても外で伸び伸び全身を使って飛び回り、大勢の仲間といっしょに仲良く遊ぶ機会は何よりも大切である。そして、一人でも多くの大人にそのことを理解してもらいたくもある。

それから、電話の主が居住する団地自治会と、様々な形での交流、情報交換をはかり、児童館の広場利用にも工夫をしたりしたのだが、そのかいあつてかどうか、その後苦情電話はなくなった。

この広場事件は、放っておいたら子どもの遊び場がなくなってしまう、という危機感を私たちに抱かせた。最も考えさせられたのは、広場で遊んでいる子どもたちに向かって『うるさいから静かにしなさい』と、大人が直接注意しなかったという点であった。

近くに住む、おじさんが出てきて、『ボールをここで投げるな!』と言ったら、一旦は逃げて、またしらんぷりして始めるか、二度とやらないか、子どもによって反応は様々だろうが、少なくとも、いろいろと考える機会になる。そして児童館の職員が、間接的にそのおじさんの言葉を伝えるより、何十倍も鮮烈に感じとるものが有るに違いない。

子どもにとって、直接大人に話し掛けられる体験は大きな出来事だ。私たちがだつて子どものころ、ボールを庭に入れて怒鳴られ、ただ遊んでいただけなのに! と、大人なんて勝手なんだからと憤慨し

たことなど数知れずある。そのことをきっかけに、あそこの家の近くではこうしよう、ボール遊びはあっちへ行こう、などと、遊び場や遊び方を気にするようになった。そしてまた、世の中にはいろんな人がいると感じたり、言わば世間というものを知るときっかけも、そんなところにあったといえるかもしれないのだ。

ところで、もっぱら児童館事業について語る時に使っているのだが、『地域との連携』という言葉聞いたことがあるだろうか。ひらたく言えば、地域ぐるみで子どもの幸せを守る、その活動拠点に児童館がなろうということである。そのために、地域住民による運営協議会を設置したり、地域イベントを企画したりと、様々な取り組みが行われている。

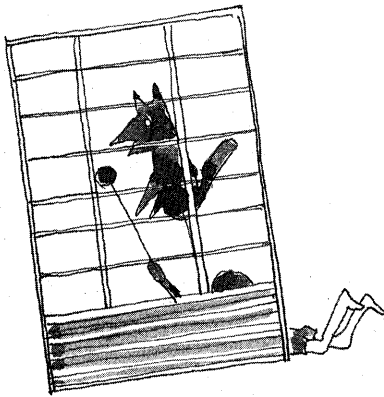
それはそれでよいが、実は、地域ぐるみで子どもを育てるといふのは、褒めるにせよ叱るにせよ、大人が子どもに正面切って付き合うということにつき

るのではないか。子どもに、「うるさい！」と怒鳴り、「なにやってるの？」と話し掛け、「危ないからそんな所へ行っちゃいけないよ」と注意し、「こんにちは」と声をかけてくれる大人に見守られて育つことが、子どもの成長にとって、非常に大切で必要なことだといえ、きつと、誰も反対しないのではないかと思うのだが、実際は、大人が皆そうしてくれるとは限らないところが難しい。

さて、子どもが元気にあそぶのが難しいという例の一つとして、スーパーマン事件をあげてみたい。男子も六年生くらいになると、今まで「はい、わかった！」なんて言って、職員の言うことをきいていた子どもも、「そんなのしんねえよ！ おれじゃねえよ！」などと何にでも逆らうようになる。暫く姿を見せなかった子どもに、

「久し振りじゃない！ 長谷川くん」

などと、声をかけると、  
「児童館なんてあほくさくてさ！ まっ、かわいそうだから来てやったよ」  
なんていう言葉が返ってくる。



ある時、その長谷川くんが闘いごっこを始めた。

その当時、児童館では闘いごっこが流行っていたのである。二手に分かれて闘うのだが、参加資格はなんらかの手製の武器をもつことで、それは、新聞紙を丸めて金銀の紙をはりスチロール皿の鏝をつけた剣だったり、紐の両端に丸めた新聞紙をしばりつけた変形ぬんちゃくだったり、ダンボールを切り抜いた楯を手にしたり、様々であった。長谷川くんも、ダンボールで作った短剣を手に加わったのだが、なんととっても庄巻は、背中に翻る長い黒マントであった。丁度夏休みの終わり頃で、お化け大会に使った大きな黒ビニールを工作材料として出していたのだが、それを利用して肩から足もとまでの背中にはためくマントを作ったのであった。その真ん中に○がくつきりと水色クレヨンで描いてあり、実にかっこよく見えた。それからは、児童館では毎日マント作りが大流行となった。皆、イニシャルや稲

光などそれぞれオリジナルマークを真ん中に描き、スーパーマンごっこと名前もついて、遊びもおおいに盛り上がっていった。

長谷川くんも、それからは連日来館して嬉々としてスーパーマンごっこに加わっていたが、ある日ぱったりとその遊びをやめてしまった。原因は明々白々であった。同級生の男子グループが来館して、長谷川くんを見ると、

「ばっかみたい！」

と、言ったのである。だから、職員がその同級生を厳しく注意した後で、長谷川くんにまた遊ぶようにといくら促しても頑として動かずじまいとなってしまうた。

これは、子ども自身がと自己規制して、遊びたいという自分の気持ちを押し殺してしまったケースである。

遊びたいという意欲をまず触発して、やりたいこ

とは、危険で他人に迷惑をかけることでなければ、なんでも実現させてあげよう、という姿勢で児童館での遊びを育てていても、こんな形で遊びが阻害されてしまうのは、まことに無念というほかない。

スーパーマンごっこを馬鹿にした子どもたちも、本音でそう言っているのかというと、そうでもないのだ。むしろ、いっしょに遊びたいのに素直に言えないか、相手を侮辱していることに気がついていないか、それがいけないことだから慎まなければいけないという気持ちが育っていないのである。

果たして、きつく叱られた同級生グループは、マントこそつけないが闘いごっこを独自に始め、さまざまな武器を作ると、一斉に外へ出て行ってしまった。きつと自分たちの秘密の遊び場へ行ったのだから。

このように、子どもが元気に遊べない理由の一つ

には、子ども自身の心のなかに、無我夢中になって自分をさらけ出すのをためらったり、熱中するのを気恥ずかしく思ったりするような心理的な束縛があるように思われる。

本来、遊ぶということは、なにもものにも縛られず自由に創造的に活動することだ。子どもたちが、もっともっと自分の好きなことに素直に夢中になってどこでも、誰とでも楽しくあそべるようになってほしいと切に願う毎日である。

(東京都葛飾区立亀有児童館)



# 編 集 後 記

息子が学校の理科で学習したと  
 いうて、発芽したばかりのトウモロ  
 コシとインゲン豆を持って帰ってき  
 た。苺バックに綿を敷いた苗床で、  
 小さな芽が出ている。毎日水やりを  
 続け、本葉が出てきた。このままで  
 は根がはれないので、「大きくなっ  
 てきたらどうするの?」と息子にき  
 くと、「わからない」。家に持ち帰っ  
 た後のことまでは学校では教えても  
 らわなかったようだ。「じゃ、植木  
 鉢に植え替えてあげようか」という  
 と、「え、植え替えられるの?」。ど  
 うやら、このまま綿の上でお豆やト  
 ウモロコシが実ると思っていたよう  
 だ。

というところで、その日の午後は急  
 きよ、息子と一緒に土いじりとなっ  
 た。以前に枯らしてしまった鉢植え  
 の土をひっくり返して、ふるいでゴ  
 ミや石を取り除き、少し残っていた  
 養土を混ぜ、水を少々、よく混ぜる  
 と結構いい感じの土ができた。こん  
 ないいかげんな土作りでは植物に申  
 し訳ないのだけど…。途中ダンゴ虫  
 やナメクジのお出ましに悲鳴をあげ  
 たり、「幼稚園のお砂遊びを思い出  
 すよ」などと言いながらの土いじ  
 り。中学生の娘も加わってついでに  
 他の花の植え替えまでやっている  
 と、道を通る人が、皆、声をかけて  
 くる。話しこんでいく人もある。植  
 物って、人の目や気持ちをはきつけ  
 て、やさしい関係を作ってくれる何  
 か不思議なパワーがあるのかもしれ  
 ない。

(K)

## 幼 児 の 教 育

第九十三巻 第九号

(一九九四年九月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成六年九月一日

編集兼発行人 本 田 和 子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一九

五〇三一五三九五―六六〇四

振替 〇〇一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレイ

ベル館にお願いします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

CD Best Collection by Naomi Abe

CDベストコレクション

阿部直美の

①One Two 手あそび編

- ①いちちょうめのドラねこ
- ②ずっどあいこ
- ③バこやさんにおかいもの
- ④まさほのがつしょうだん
- ⑤トントンパチパチ
- ⑥ガシコリやまのジャンケンポン
- ⑦おほしさまゆび
- ⑧むしのおんかくかい
- ⑨さむがりやのおうさま
- ⑩すてきなおくりもの
- ⑪ゆかいなおぼけ
- ⑫さあみんなで

②みんなでたいそうGO/GO/GO!

- ①どうぶつたいそう1・2・3
- ②いとまきたいそう
- ③ちびっこザウルス
- ④ライオンロック
- ⑤かいぞくたいそう
- ⑥チュールアップのコップ
- ⑦七五三サンバ
- ⑧うんどうかいファイブ
- ⑨マンボでぞうさん
- ⑩ひつぎむしビョン
- ⑪あみよてトントン
- ⑫めざせたからじま

## ①One Two 手あそび編

練習しなくても簡単に遊べる作品集で、長年保育現場で人気のある曲ばかりを収録。年少児向けにも使えて便利、類書がないので現場で要望されている。

CDつき遊び方解説書で表現活動入門として役立つ。うたはCDにまかせて保育者は子どもと一緒に遊び、遊びの中から自然にリズム感や表現力を育てることに専念できるという新しい保育にそった保育資料。

## ②みんなでたいそうGO/GO/GO! (日常保育と運動会のリズム表現)

日常保育や運動会にすぐ使える表現遊び曲を集めたもので、ストーリー性をもたせたリズム遊びの作品や、体で表現する体操遊びを中心に構成したCDつき遊び方解説書。

保育現場でヒットした曲を新しいアレンジで録音したもので、曲が流れると自然に体が動きだし、表現遊びにさそわれる。うきうきするような曲集。

子どもの動きやイメージを軸とした新しいリズム表現にチャレンジする保育資料。

これさえあれば、運動会のもりあがりももう安心。



阿部直美 編著 CD/定価各2,200円(税込)解説書/A4変型判・48頁・定価各1,800円(税込)・セット定価各4,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

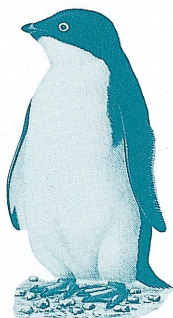


幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。

# ふしぎがわかる しぜん図鑑

監修 東京大学名誉教授 水野丈夫

全10巻  
完結



●第1巻  
こんちゅう

監修 元東京都多摩動物公園園長 矢島 稜

●第3巻  
しょくぶつ

監修 園芸研究家 浅山英一

●第5巻  
とり

監修 東邦大学理学部 長谷川 博

●第7巻  
きょうりゅうと  
おおむかしのいきもの

監修 国立科学博物館 小島郁生

●第9巻 新刊  
うちゅう せいざ

監修 五島プラネタリウム館長 村山定男

●第2巻  
どうぶつ

監修 東京都上野動物園園長 増井光子

●第4巻  
みずのいきもの

監修 国立科学博物館 武田正倫

●第6巻  
ひとのからだ

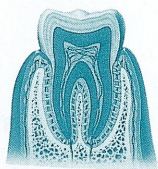
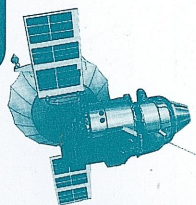
監修 愛育病院小児科部長 岡本 暁

●第8巻 新刊  
ちきゅう かんきょう

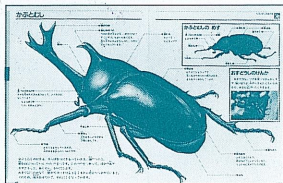
監修 放送大学教授 奈須紀幸

●第10巻 新刊  
はるなつ あき ふゆ

監修 理科教育研究会 中山周平



A4判・上製本・本文116頁・定価各2,000円(税込)



- スーパーリアリズムのワイドな画面によって自然界への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- 基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。
- なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりました。豊富な写真とイラストを組み合わせで、眺めるだけでも楽しい構成です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03 (5395) 6608 (代) にお問い合わせください。

キンダーブックの  
フレーベル館